

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その5－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 博志・高田 昌実・萩原 隆二
鹿児島大学 名誉教授 田島 紘己
加治木温泉病院 納 光弘
県立大島病院 夏越 祥次
粟 隆志

[はじめに]

今回は、第六章 [4] ジョルジュ・サンドのつづきである。ここでのショパンは、ピアノ音楽史で、重要な作曲家の一人であり、限られた領域ではあるが、傑作を遺した。

ただ遺された作品は、彼の才能に比し、極めて限定的で少ない。この事は、後世に彼の名を残すのに有利に働いたかもしれないが、

残念な気もする。

本稿では、彼の人生を表面的、単純に讃美するのではなく、彼の俗っぽい貴族趣味に生きた人生、真実の姿を若干のオブレートに包みながら、述べたい（個人的見解）。

図38で、右棚の上から3段目、赤枠の部分がショパン全作品の全集である。

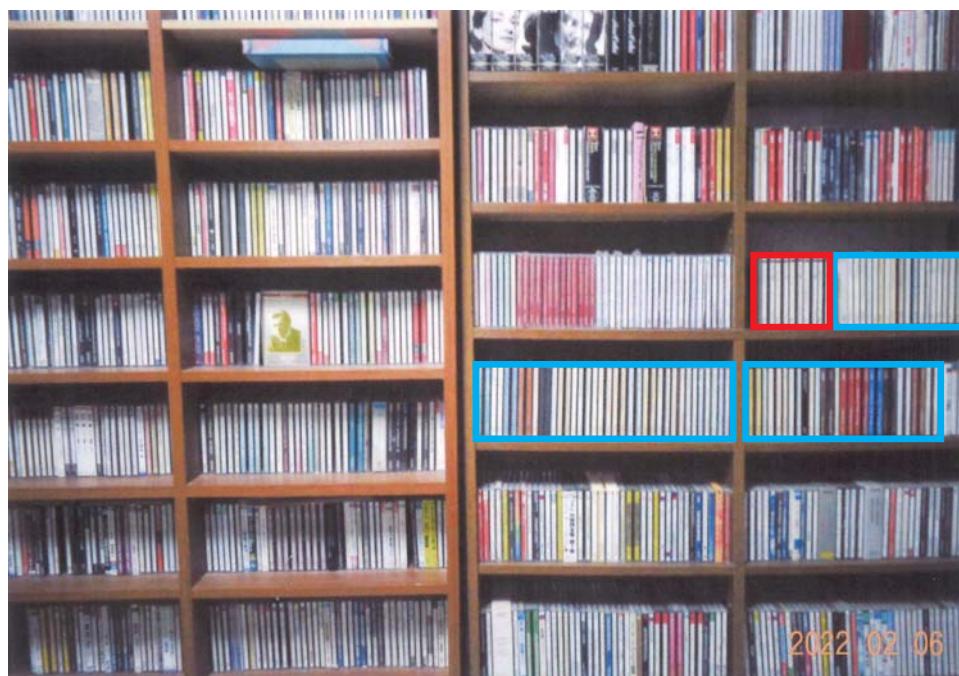


図38 ショパンの作品全曲

■ : ショパンの作品全曲

■ : リストのピアノ独奏曲

リストには、この他、多数の鍵盤楽曲があり、それだけでショパンの全作品の10倍以上に及ぶ。その他、リストには、膨大な、宗教歌や交響曲、歌曲などがある。



図39 現代のヨーロッパ地図

その右側と下段の青枠の部分が、リストのピアノ独奏曲全集（R.ハワード）である。

リストには、他に2台のピアノ、オルガン曲など膨大な鍵盤楽器曲があり、それらでショパンの全作品の10倍以上に及ぶだろう。

更にリストには、多分、同等の交響曲、交響詩、歌曲、宗教曲、室内楽曲等がある。

ショパンの作品数が、非常に少ない事が分かるだろう。その全貌は、一目で見渡せる。

図39は、現代のヨーロッパ地図である。各国や、大都市の位置関係を理解する為の一助として提示する。

[4] ジョルジュ・サンド つづき

(1) リスト、マリー・ダグーとジョルジュ

リストは1833年、ベルリオーズに狭き門のマリー・ダグーのサロンで、ダグーを紹介された。マリー自身、フンメルにピアノを習ったと言われる。

リストとマリーは、まもなく親しくなる。



図40 リストの肖像画
ジーン・シェファによる油絵（1835～36）。
(Burger: F. Liszt. Princeton Univ. Press, 1989)

34年には、リストはミュッセの紹介で、ジョルジュ・サンドとも知り合う。

図41のように、ジョルジュは男女同権主義者で、タバコをふかした。またズボン等、男



図41 ノーアンの館でピアノを弾くリスト
ジョルジュの息子、モーリスの画 (Ca. 1837)
(C. Sutton: F. Liszt. The Univ. of Chicago Press, 1989)

装を好んだ。

ペンネームのジョルジュ（男性名）は、昔の恋人の作家、ジユール（ジョージ）・サンドーにちなんだ。作家としてのジョルジュの文学全集は、109巻にも及ぶ。

ジョルジュには、息子のモーリスと娘のソランジュの2人の子供がいた。3人家族は、ジョルジュの領地、ノーアンの館に住んでいた。

図41は、館内で、リストがジョルジュにピアノを弾いて聴かせている所を、モーリスが描いたものである。

リストは、くつろいだ様子で弾いているが、上肢・手の位置など、彼の演奏の特徴をよくとらえている（ドラクロワ仕込み）。

画の右上には、「ママは、リストの演奏にびっくりしている」と書いているのが分かる。

巨匠ドラクロワは、弟子をとらなかつたが、モーリスには、特別に教えていた。

(2) ポーランド情勢とショパンがパリに到着し、ジョルジュと出会うまで
ヨーロッパの位置関係は、図39を参照して頂きたい。

さて18世紀末～19世紀初頭に、ポーランド

は4度に亘り、ロシア、プロイセン（ドイツ）、オーストリアの3列強により、分割されていた。

1807年、仏のナポレオンによるナポレオン戦争により、ポーランドは短期間、ワルシャワ公国として独立した。然し、その後の、ナポレオンの敗北により、15年のウィーン会議で、ロシア皇帝を元首とするポーランド立憲王国が成立した。

この時、将来ショパンを援助する事になる、ポーランド人が、フランスやプロイセンに多数亡命した。

その後、ロシアの専制に対し、ポーランド人は、独立の機会を窺っていた。

独立運動（革命）の機運が高まり、一触即発の状態であった1830年11月2日、一刻も早い脱出を考えたショパンは「理想の女性」コンスタンチアを残し、親友のティテュスと2人で、祖国のワルシャワを後にした。

向かう先は、ハイドン、モーツアルト、ベートーヴェンなど活躍の、音楽の聖地ウィーンである。

ウィーンは、前年ショパンが訪れ、演奏会や、ベートーヴェンのパトロンのリヒノフスキ伯爵家のサロンなどで称讃を得ていたからである。

ポーランドを無事脱出し、安心したショパンは、希望に胸をふくらませていたに違いない。

11月12日には、ドレスデンに到着。ここでは、ポーランドの同胞のコーマー伯爵邸に立ち寄り、その長女、デルフィーヌ・ポトツカ伯爵夫人と出会う。彼女はその後、恋人、親友となる。

11月23日、ウィーンに到着。

ところがわずか6日後の11月29日、ワルシャワで恐れていた革命が勃発した。

ティテュスは、祖国ポーランドの為に、ロシア軍と戦うと、直ちに祖国に向かった。

ショパンは、家族、同胞、祖国の運命を心配し、口に出したり、手紙にしためたりはしたが、同胞の凄惨な革命闘争の中、結果的に保身の為、ウィーンに留まるのである。

ショパンは「仕方なく、夕方には正装に着がえ、出席する沢山の晩餐会、演奏会、舞踏会は退屈なばかりで、良い事は何もない。ワルシャワに帰れば、父の重荷になるだけだ」などと自己弁護に努めながら、どっぷり上流階級趣味に染まっていくのである。

友人達は、ぞくぞく革命軍に加わり、前戦に出兵した。祖国の革命の戦いは、激しさを増していったが、それと共に、かつてポーランドを分割していたオーストリア人の、ポーランド人に対する反感、憎しみは増大していった。

様々な理由はあろうが、ウィーンで身の危険を感じてきたショパンは、苦労の末、31年7月20日、今度はパリに向けて出発した。

途中ザルツブルクを経て、ミュンヘンに到着。安全なこの地で数週間滞在し、演奏会を開き、良好な批評を得た。

然し演奏会の数日後、シュトゥットガルトで、多数の犠牲者を出した祖国の革命は失敗し、ワルシャワが陥落した事を知る。

1831年9月中旬、パリに到着した。

彼は、マルファッティの紹介状を利用し、パリの音楽家達に近づいていった。そして、リスト、ヒラー、メンデルスゾーンなどと親しくなり、32年にパリでの第1回目の演奏会を開いた。演奏会は成功したが、赤字で経済的には恵まれなかった。

(付録) ピアノの歴史とサル・プレイエル

打弦楽器のピアノは、1700年頃に伊のクリストフォリが考案したと言われ、1790年頃には、撥弦楽器のクラプサン(仏)、ハープシコード(英)に完全に取ってかわった。

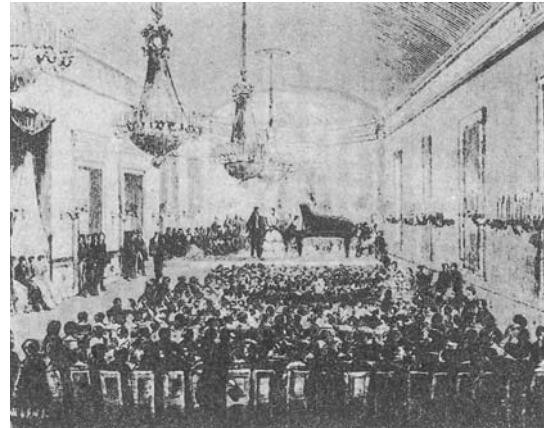


図42 サル・プレイエル(パリ)

19世紀にピアノ製造業は発展した。1839年にプレイエルのホール、サル・プレイエルは550席となった。ショパンは、プレイエルに前奏曲集を献呈。

(音楽の手帖、ショパン、青土社、1980)

ベートーヴェンは、フォーゲル、エラール、シュトライヒヤー、ブロードウッドなどを贈られたが、ピアノの音域が拡大する毎に、作品の音域が広がっていった。

20世紀初頭、ウィーンでは、ナネット、シュトライヒヤー、グラーフ、ベーゼンドルファーが、英ではブロードウッド、パリでは、エラールとプレイエルが知られていた。

特にエラールは、1821年にダブル・エスケープメント・アクションの特許を得た。この機構により、毎秒約14回の同一音の高速連打が可能となり、トリルやトルモロの演奏上の表現力が高まった。

ベーゼンドルファーやベヒュタインは、リストの強烈な打鍵に耐えられるピアノとして有名になった。

1859年、スタインウェイは、それまでの鉄製フレームと交叉弦、それにダブル・エスケープメントを取り入れたグランドピアノを作製し、薩摩も出展した1867年のパリ万博で好評を博した。

(鉄製フレーム：1つの鍵盤に、最大3本の弦が対応するので、88鍵に対し200本以上の

[隨筆・その他]

ピアノ線、ミュージック・ワイヤーが必要で、フレームにかかる張力は巨大となる)

1831年製のショパン所持のプレイエルや沢山のリストのピアノなどで演奏した、LPやCDは多種あり、当時の音を楽しめる。

19世紀、精密楽器ピアノ製作は一大産業であり、繁栄していた。32年のショパンのパリでの第1回演奏会も、プレイエル・サロンで催された。

この演奏会場は、39年には、550席のサル・プレイエルに拡大された。

ショパンの公開演奏会は稀で、3年間の空白後、41年4月にここで演奏会を開いたが、この時、親切なリストは批評家として、音楽雑誌で彼を絶賛した。

更に、48年2月16日、6年間の空白を経てパリで最後となる演奏会を、ここで開いた。家族への手紙は、「一週間前から切符は売切れ、一律20フランで、宮廷で40枚の買いあげがあった。2回目の演奏会の申し込みもきている」など、得意満面の内容であった。会は、47年にポツカに献呈した「小犬のワルツ」で最高頂に達し、この曲はアンコールされた。

久しぶりの聴衆を前の演奏会ではあったが、20フラン金貨一枚を払える庶民はほとんどいなかった。会場を満たしたのは、貴族階級などの婦女子であった。気を良くしたショパンは、次の演奏会を3月10日に予定した。

ところが、この演奏会の6日後の48年2月22日、パリ2月革命が勃発し、24日に新政府が樹立した。

(付録 おわり)

さて話をもとにもどそう。1832年、パリでの初の演奏会は成功はしたものの、赤字で経済的には恵まれなかった。

更にこの年、パリは、30年の7月革命の余波とコレラに明け暮れていた。



図43 ラジヴィーウ公爵家のショパン
シェミラッキが想像で描いた絵
(西洋音楽史大系5、K.K.学習研究社、1998)

パリで経済的に希望が持てないと感じたショパンは、今度は新天地のアメリカで一旗揚げようと、亡命ポーランド人達と、アメリカ渡航を考えていた。

この頃、街角でたまたま出会った旧知のラジヴィーウ公爵に渡米計画を話した。驚いた公爵は、ロスチャイルド男爵のサロンに行くよう紹介した。ここで、称讃を得、彼の世界は一変し、ショパンの生涯の生活パターンが確立する。ショパンは上流階級の婦女子達の間で、多くのレッスン希望者を得る事ができるようになったのである。ショパンは、ロスチャイルド男爵夫人に、「バラード第4番」と「ワルツ、作品64-2」を献呈した。

図43は、恩人のラジヴィーウ公爵家のサロンで演奏するショパン。ショパンのサロンでの演奏の絵は、ほとんど目にしない。

これは、ポーランドの画家、シェミラッキが想像で描いたものである。

チエロと作曲を趣味とした公爵に、ショパンは、1829年作曲の唯一の「ピアノ三重奏曲」を32年に献呈している。

リストやシューマンなどの称讃にて、自信を得たショパンの選んだ道は…。

ショパンは、上流階級の邸宅、サロンで優

美、甘美な曲を演奏し、夫人や令嬢を魅了し、多くの小曲を彼女達に献呈し、彼女達の自尊心をくすぐり、教師として高額なレッスン料を稼ぐのである（この点は、前途有望なピアニストに無料でレッスンをつけ、数多くの次代を担った歴史的大ピアニストを育てたリストとは大きく異なる）。

労働者の日給が2~3フランの時代に、ショパンの1レッスン料は、20~25フラン、多い日は、1日7~8レッスンをこなしたとも言われる。

仕立てのよい高級服を着て、香水を振り掛け、白手袋を持ち、上流階級の仲間入りをするという、彼の夢見た理想の生活を手にしたのである。

その後、ショパンは、作曲の師エルスナーの希望するような大曲を作曲する事はなかった。なお、彼は正式にピアノ奏法を学んだ事は無かった。彼の演奏は、教育の賜ではなく、彼の生来の能力に負っているのである。

大曲としては、生涯に彼は、ピアノとオー



図44 女流ピアニスト、マリー・モーク＝プレイエル
(西洋音楽史大系5、K.K.学習研究社、1998)

ケストラのための曲を6曲書いている。

2曲のピアノ協奏曲を含む、5曲は全てポーランド時代のものである。

例外の1曲、アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズのポロネーズは、30~31年の作曲、アンダンテ・スピアナートのみが、パリ時代の1834年の作曲である。

そもそも、婦女子が大曲を献呈されても無意味で、それより自分で演奏できる優美な小曲を贈られた方がうれしいのは、自明の事であるし、小曲を沢山書いた方が、献呈するのに数の上でも効率がよい。

ちなみに32年には、プレイエル夫人に、「3つのノクターン作品9、ノクターン第1、2、3番」を献呈している。ぬかりない。

プレイエル夫人とは、ベルリオーズとの婚約を破棄し、さっさとピアノ製作業者プレイエルと結婚した、女流ピアニスト、マリー・



図45 プレイエル夫人と共に演ずるリスト
プログラム5番は2人の「華麗なる二重奏」
(プレイエル夫人の1839年の演奏会プログラム)

モークである。ブレイエル夫人はリストとも親しく、共演もしている（図44、45）。

なお2番は、タイロン・パワー、キム・ノヴァク主演映画「愛情物語、1956」の主題歌（to love again）として、カーメン・キャバレロのアレンジと演奏で有名となった。

キャバレロやオスカー・ピーターソンらが鹿児島で公演した時代が、なつかしい人もいらっしゃるだろう。

ショパンのノクターン（夜想曲）や、マズルカ、ワルツなどは、婦女子への献呈に最適であった。

33年には、前記のデルフォーヌ・ポトツカ伯爵夫人という恋人（後に親友）もできた。彼女には、重要な「ピアノ協奏曲第2番」と通称「小犬のワルツ、作品64-1」を献呈した。

35年には、ドレスデンで旧知のポーランド貴族、ヴォジンスキ伯爵家を訪れた。ここで、美しく成長した令嬢のマリアと再会した。

早速ショパンは「ワルツ、作品69-1」を作曲、「マリア嬢のために、1835年10月、ドレスデンにて」と記し、マリアに献呈した。

36年夏、伯爵一家がマリエンバードの別荘に滞在中と知ったショパンは、直ぐ様そこに駆けつけた。自信満々のショパンは、マリアに求婚し、見事、婚約を勝ちとった。

この頃、マリア・ヴォジンスキが描いたショパンの肖像画が残されている。ショパンの知性と繊細さをよく表現している（図46）。

ショパンは、名実共に上流階級になる事を実感したに違いない。祖国ポーランドやコンスタンチアの事など、どこ吹く風の気分である。

然し不幸な事に、婚約は破棄された。

この楽譜は、出版される事なく、ショパンの死後、手紙の束と共に発見された。

楽譜には、マリア自身の手で「L'Adieu,さようなら」と書き込まれていた。



図46 婚約者マリア・ヴォジンスキの画いた
ショパンの肖像画（1836）
(音楽の手帖、ショパン、青土社、1980)

この曲は、1855年「別れのワルツ」として出版された。はかない恋であった。

前記のように、夜想曲では2番が有名だが遺作（作者の死後出版された作品、通常作品番号は無い）の3曲が遺された。

この中の夜想曲嬰ハ短調は、ショパンのポーランド時代の1830年、「私の第2協奏曲の練習前に、姉のルイーズが弾くために」と記された、わずか3分強の哀愁に満ちた小曲である。この曲を聴くと、ワルシャワを去った後の、ショパンの悲しくも、はかなく短い人生を暗示しているように感じるのは、私だけであろうか。ダヴィンチのモナ・リザのように、ショパンが生前、この曲を出版しなかった事が分かる気がする。

（つづく）